

四条町の盛衰

長い歴史をもつ四条町には当然盛衰があった。

四条町の住民実勢を統計資料で明らかに出来るのは昭和以降である。

ここでは 1930 年(昭和 5)以降について国勢調査結果を掲示した。なお、第 1 回国勢調査は 1920 年(大正 5)に実施されており、それから 10 年を経て第 2 回が実施された。第 2 回以降は 10 年の中間に簡易調査が行われたので 5 年毎のデータが得られた。1940 年調査は実施されたが戦時であり結果は公表されなかったのではないか。入手できない。1945 年は敗戦直後で調査中止になった。

四条町人口・世帯数の推移
(国勢調査)

	人口	世帯数	1世帯人口
1930 昭和5	463	69	6.7
1935 昭和10	443	58	7.6
1940 昭和15	—	—	—
1945 昭和20	—	—	—
1950 昭和25	273	63	4.3
1955 昭和30	309	71	4.4
1960 昭和35	316	67	4.7
1965 昭和40	302	64	4.7
1970 昭和45	264	61	4.3
1975 昭和50	206	44	4.7
1980 昭和55	130	44	2.9
1985 昭和60	120	48	2.5
1990 平成2	142	85	1.7
1995 平成7	95	59	1.6
2000 平成12	129	93	1.4
2005 平成17	243	154	1.6
2010 平成22	296	219	1.4

1930 年の四条町の世帯数は 69、人

口 463、1 世帯平均人口は 6.7 である。

戦前で町内が最も繁栄していた時期

と考えられる。1 世帯人口 6.7 には、住

み込みの店員・家事使用人が含まれ

ている。

戦後の 1955 年(昭和 30)は戦前を引

き継ぐ形の四条町最後の繁栄期で

あった。しかし、1 世帯人口は減少して

住み込みが無くなりつつあったことを

示している。1956 年(昭和 31)作成の

四条町住宅地図(住宅協会編)を見る

と、家並みは総て一戸建または長屋で、鉄筋コンクリート造りの建物はあっても従来からの町家の敷地に収まっている。町内東側・西側の通りに面して商家が並び、業種は呉服、織物、金箔等和装関連のほかに、染工場、旅館、仕出屋、自転車屋、道具屋、帽子屋、医院など多岐にわたっている。東西両側それぞれに一筋あった路地に店を持たない職人衆の長屋があった。

1970 年(昭和 45)辺りから町内の世帯数・人口は急速に減少してゆく。和服文化衰退による織維業斜陽化、都市化の進行による職住分離、家督分散、郊外移転による都心部空洞化が合わさって生じた現象である。

それに追い討ちをかけるように町内の家並みが途切れ始めた。一戸建が壊されて数戸まとめてビルに代わる形である。最も大きな家並み破壊は 1995 年(平成 7)に生じた。町内東側の約 4 分

の1に池坊短大のキャンパスが進出したのである。池坊短大は1952年(昭和27)に室町通西側に開学したが、徐々に西方へキャンパスを広げて新町通東側に達したのである。1970年(昭和45)の61世帯が1975年(昭和50)に44世帯に急減したのはその分の住宅が消滅したことを如実に示している。それからの十数年間が四条町沈滞の時期で町衆減少が続いた。

人口も急速に減っていたが、1997年(平成9)頃を底にして世帯・人口ともに上昇に転じる。それから急速に増加して2000年(平成12)には戦前最盛期の世帯数を抜き、さらに急成長して2005年(平成17)は154世帯、2010年(平成22)には219世帯にまで達した。

町内にマンションが立ち並んだからである。それも2000年までは10階建以下だったが2005年には11階を超える高層マンションが建って住民数を押し上げた。

四条町の住宅形態別世帯数・人口 (国勢調査)

	1995平成7			2000平成12			2005平成17		
	世帯数	世帯人員	1世帯人口	世帯数	世帯人員	1世帯人口	世帯数	世帯人員	1世帯人口
合計	59	95	1.6	93	129	1.4	154	225	1.5
一戸建て	11	35	3.2	12	32	2.7	11	28	2.6
長屋	8	20	2.5	5	10	2	2	3	1.5
共同住宅計	40	40	1	76	87	1.1	140	188	1.3
1~2階建て	—	—	—	9	9	1	11	12	1.1
3~5階建て	—	—	—	11	11	1	13	13	1
6~10階建て	40	40	1	56	67	1.2	45	58	1.3
11階以上	—	—	—	—	—	—	71	105	1.5

しかし、それは町衆復活を意味しない。1世帯当たり人口は1乃至1.5であり、高層にファミリーマンションが含まれるものの大半は単身者である。下表のように過半数が非就業世帯(すなわち単身の学生)であり、雇用者世帯(すなわちサラリーマン)も次第に増えて2005年には4割を超えた。

四条町の就業世帯構成(国勢調査・一般世帯)

	1995 平成7		2000 平成12		2005 平成17	
合計世帯数	59	100	93	100	154	100
業主世帯	5	8.5	6	6.5	5	3.2
雇用者世帯	13	22	24	25.8	65	42.2
その他	4	6.8	6	6.5	5	3.2
非就業世帯	37	62.7	57	61.3	79	51.3

業主世帯(すなわち四条町で事業を営む町衆)は5~6軒ということである。

人口構成も、子どもはここ10年でわずかに増えたものの5%以下であり、20歳代が半数を占めていた10年間の後、最近10年は30代・40代が増え始めている。前記のファミリーマンション進

四条町の年代別人口構成

国勢調査

	人口合計	9歳以下	10~19歳	20~29歳	30~39歳	40~49歳	50~59歳	60歳~	不明
1995平成7 構成比	95 100	2 2.1	6 6.3	43 45.3	6 6.3	6 6.3	8 8.4	24 25.3	— —
2000平成12 構成比	129 100	4 3.1	12 9.3	61 47.3	7 5.4	7 5.4	10 7.8	28 21.7	— —
2005平成17 構成比	243 100	12 5.3	19 8.4	77 34.2	37 16.4	28 12.4	13 5.8	39 17.3	18 —
2010平成22 構成比	296 100	13 4.2	11 4.1	75 27.8	77 28.2	42 15.6	15 5.6	37 9.9	26 —

出の結果である。

四条町の住人は昭和と平成の境で様変わりしたのである。

2009年(平成21)作成の四条町住宅地図(ゼンリン編)では、町内の東西両側で店を構えているのは呉服2軒、飲食店3軒(和食、鮨、洋食)、そして病院であり、町内に含まれるが四条通りに面して果物、洋品、タバコの3軒ですべてである。それ以外はオフィスビル、マンション等の共同住宅、大学キャンパス、そして数軒のしもた屋である。路地は消滅し長屋の職人衆も消えた。

職住一致で家族共々居住し、家業を営み、子どもを育て、代々の家屋を引継いできた往時の姿はほぼ完全に失われて、一過性の住人が大半を占めることになったのである。もともと学生の多い京都でも居住世帯の6割までが学生という町はあまりない。市内中心の四条烏丸に至近の四条町の好条件がもたらした現象である。この住人は数年で入れ替わる。4年を超えて住み続けることはない。サラリーマンも、単身者の場合は殊に、転勤等の事情で数年で入れ替わることが多い。

住人は増えたが町衆は増えない。町衆に育つ前に居なくなる。もともと、地元意識を持たない仮住まいの人々である。住民登録をしない人も多い。当然、町内会に加入する人もなく、多くの場合マンションのオーナーが部屋数に応じてしかるべき金額を町内会費として納入している。

町衆は何処へ行ったのか。

閉じた店の敷地にマンションを建て、その最上階を自家用に占拠して町内に住み続けている人もあるが、多くは自宅は郊外に移してオーナーとしてマンションを管理している。敷地ごと他人に譲渡され、これまで四条町と縁のなかった人がオーナーになっているケースもある。

町衆が消えてゆく過程を実例でたどってみる必要がある。